

今年度の学校研究の概要

学校教育目標

「主体的に学び、心身共にたくましい子どもの育成」

の実現のためにどのような研究を進めるか

「学校は子供が創るもの」であり、「その子供を育てるのが授業」

授業（学校の教育活動全般）で子供を伸ばす。そして、学校を育てる。

→その結果、更なる子供の成長となり、いずれ、**社会貢献できる人財**になる。

（よりよい社会を創ろうとする人、自分の人生に責任をもって生活する人）

研究主題

「自ら考え、主体的に生活を創る子供の育成」

～ 関わりと教師のみとりを大切にした授業づくり ～

（１） 主題設定の理由

本校の研究は、「自ら考え、生き生きと学ぶ子供の育成」を主題としてスタートして 10 年を超えた。昨年度は、サブテーマを変更し、活用力の育成をめざして研究を進めてきた。研究初年度として、「活用力とは何か」を様々な角度から検討し、研究授業を試みたが、明確な手応えをつかむことが難しかった。

それを踏まえて今年度の研究について話し合ったところ、「活用力をテーマに研究を進めても手ごたえがつかめない」「結局八小ではどのようなものを活用力というのか」「活用力を追究する前に、まずは今の八小の子供の実態をもう一度見直し、どんなところを伸ばしていきたいかを考えて研究を進める必要がある」などの意見が出た。

話し合いを受け、まずは一番大事な子供の実態をもう一度見つめ直すことにした。

八小の子供は、比較的学习には意欲的で授業に真面目に取り組んでいる、黙って先生の言うことを聞く、授業は教科書でするものだと疑わない、点数は悪くはない、決まっていないことはできず臨機応変に対応できる子供が少ない、上位と下位の子供の差が激しい、自信をもって話す子供が少なく不安な様子が見られる、リーダー性に乏しい、能力はあるがそれをもっと伸ばそうという気持ちがあまり見られない、周りに流されやすい、周りを気にして出ようとしない、などの面が挙げられた。

この実態を受け、八小のためにまずしなければいけないことは、我々教師の向かい方ではないかと考えた。なぜ臨機応変に対応できないかを考えれば、経験不足、気持ちが優しい、対応の仕方を知らない、やる気がない、など様々であろう。その子供がどのような気持ちなのかを、共に生活している仲間として、教師が推測し、最適な支援をしなければできるようにはならないであろう。なぜリーダーとして出てこないのかも、その子供の目線で考え、共に生活している仲間として教師が推測し、最適な支援をする必要があると考える。授業中の“変”と思われる発言も、教師のみとりにより、言い換え、つけたし、考えの経緯を聞く、とことん話をさせるなどの支援で、いくらでも素晴らしい発言に生まれ変わる可能性をもっている。まず一步目は、我々教師の「適切なみとり」を大事にすることが子供を幸せにすることではないかと考えた。そして、『教師のみとり』は、経験によって鍛えていくしかないものであるため、今年度の柱の一つにした。

また、昨年度、山形大学大学院教育実践研究科の出口毅教授からご指導をいただき、OECDの「キー・コンピテンシー（資質・能力）」では、①相互作用的に道具を用いる力②多様な集団において人間関係を構築する力③自律的に行動する力が求められていることを教えていただいた。そして、その力を高めるためには、「どのように学んだか」「どのように知っているか」が大事であり、『教える授業から考えさせる授業への転換』が欠かせないことを伺った。私たち自身が、学び続ける教師でなければならないということであった。

教師は、学級をマネジメントし、子供の生活をクリエイトし、関わりをコーディネートする役割がある。特に本年度は、単元構成をマネジメント・クリエイト・コーディネートすることを大切にしたい。その一歩が、「教科書をどう自分のものにするか」である。「この授業の流れでいいのか」「子供は本当に考えたのか」など、目の前の子供の実態と考えさせたいこと（教材・題材）を自分で熟考し、納得した上で授業を行ったときに、「やっていて楽しかった」「子供が飽きていた」など、真摯に自分を振り返ることができるのであろう。同じ教材でも、隣のクラスとは何かが違うはずである。以前に受け持ったクラスとは異なるはずである。八小の教師は、毎回の授業に新鮮な気持ちで向き合い、真剣勝負ができる教師である。そのためにもやはり、『教師のみとり』が大事である。

もう一つに、「よく考える子供にしたい」「よく聴き、伝え合える子供にしたい」「相手に伝わるように書くことができる子供にしたい」などの意見もあった。子供が、仲間・教材・先生など、様々な関わりの中で伸びていくことから、『関わることを』大切にしていきたいという気持ちが伝わってきた。

しかし、「関わり」は、人がいれば自然に発生するものではなく、何よりも、質のよい「関わり」には、場の設定のみならず、意図的な仕掛けが大切である。クラスの実態や、子供の特性をみとって、どのような関わりをねらい、子供の成長をどのように手助けしていくかを考え抜くことが責務となる。そこで『関わり』を、今年度のもう一つの柱にした。

今年度の研究は、これまでの研究の成果と課題を踏まえ、昨年度の活用力の向上もめざしている。その上で、より幅を広げ、多面的なしなやかでたくましい子供の育成をめざしていくために、国語科および算数科、そして、生活全般をも子供を育てていく機会としてとらえていくことにした。

全員で授業実践に取り組むことができ、同じ土俵で「子供のみとり」について語り合うのにふさわしいのが国語科および算数科である。また、「聴く力」「話す力」「読解力」「語彙力」「思考力」「学習の有用感」など、習得・探究・活用の力を高めていくためにも、国語科および算数科を中心に組み込んでいくことが、今の八小の子供にも、私達八小の教師にも、共にふさわしいと考えた。

まず今年度は、八小の子供の今の実態を明確にみとり、人として成長して欲しい姿を「思考力・表現力・行動力・課題解決能力・関わる力」など、ある程度大きくとらえ、全職員でめざすべき方向性を共有したい。

個人研究ではなく学校研究として、各学年部・各学年・各学級で子供の実態を把握し、学年部・学級で核として高めていきたい力を見極め、研究を進めていく。そして、その姿にどのように迫っていくのかを自分達で考え、実践し、個や学級・学年の変容を丁寧にみとっていくことを今年度の研究の在り方としていく。たった一つのやり方で子供を伸ばしていくのではなく、いろいろな方法を使い、多様な考えで実践を積み上げて、責任をもって子供を伸ばしていくことは、学級の成果だけに終わらず、八小の子供全体の成長になっていくはずである。子供が互いを見て成長していく、「先輩のようになりたい」という思いが自然に湧いてくる学校は、まさに子供主体の学校であろう。

また、研究の日常化を意識していくことで、授業だけではなくあらゆる生活場面において子供を育てていくことを大事にしていきたいと考えている。研究授業のみならず、普段の子供の行動、話し方、聞き方などの姿を、全職員が意識して関わったりみとったりしていくことを大事にし、生活全般を子供を育てる機会とすることが、学校研究を全職員で深めていくことになると考えた。そしてまた、研究のための研究ではなく、子供を育てるために研究がどのような役割を果たすことができるのかを追い求め、研究のあるべき姿にも迫っていくことで、我々教師自身の財産にもなることをもねらっている。

（２） 研究の目標

目標は、八小全体を高めていくこと、八小の子供一人一人を伸ばすことである。そのために、我々教師のみとる力を高め、子供の見方や支援のあり方を見直していくことが大事であると考えている。

学校は、子供を幸せにするためにあり、その多くの時間を費やしている場が「授業」である。だからこそ、改めて、授業において、教師が子供一人一人をどのようにみとり、声をかけたのか、発問したのか、指名したのか、授業構想を立てたのかを見つめる必要があ

る。研究授業だけでなく、日々の授業で、「教師のみとり方」をより深いものにし、「目の前の子供にとって、よりよい関わりとはどのようなものか」を追究していくようにする。

また、最終的な目標は、子供が自分の力で、自分らしくそしてたくましく生きていくことである。そのためには、子供の成長を授業だけにとどめていてはいけない。遊びの中、委員会活動の中、掃除の中、給食の中…学校生活全般において、教職員一人一人が子供を見つめ、みとり、アクションを起こしていくことも大事にしていきたい。

今年度はまだ一年目である。まずは、「自分がどうみとっているか」を意識することから始めていきたい。その結果、声をかける、厳しく注意する、様子を観る、あえて見ないふりをしておくなどの行動が、子供にとってどうであったのか、研究授業以外の場面でも常に全職員で話し合っていきたい。そして、『子供に力をつける学校』にしていきたい。

また、学級経営は全ての基本にもなっている。学級経営とは、子供と教師の関係であり、そこには教師の思いや願いが表れている。授業も学校生活の中に含まれていることを考えれば、学級経営をはずして研究を進めることは難しい。研究が深まるように、学級経営についてもみんなで考えていきたい。

(3) 研究の方法

- ① 「めざす子供の姿」を学年部ごとに考え、望ましい人間関係の学級づくりがなされているかを大切に、生活全般で研究の成果を検証していくことで、研究の日常化を図る。
- ② 国語科、算数科の授業を中心に、全学級で提案授業を公開し、「つきたい力」「めざす子供の姿」を明確にした授業実践を重ねていく。
- ③ 事前研を大事にした研究を進める。個人研究になりがちな側面があるため、学年部で必ず事前研を行い、学年部の「めざす子供の姿」に沿った研究になっているか検討し、学年部で納得した研究授業を提案する。
- ④ 大研・中研の事前研は2週間前までに行い、学年部と研究主任で行う。指導案提出は1週間前までとし、研究主任が講師に送付する。小研の事前研については、1週間前まで学年部と研究主任で行う。授業研を行う場合は、指導案を2日前までに全職員に配布する。
- ⑤ 全体研（事後研）の中で、子供の姿を基に、一人一人がみとったことを出し合い、子供の学び・成長・関わりなどについて話を深め、八小の研究の積み上げを図る。
- ⑥ 事後研での話し合いが深まるように、授業参観後にカードに記入提出し、それを基に話し合いを深めていく。（質問・感想・改善点の3観点のカードを準備）
- ⑦ 大研の事後研は、基本的に全体で行うが、グループ討議も取り入れる。参観カードを有効に活用し、できるだけ話の柱立てをしながら、授業者と八小のためになる話し合いを進める。中研の事後研は、推進委員以外もできるだけ参加し、自己の研修を深めるようにする。小研は学年部と研究主任で行い、推進委員を中心に進める。
- ⑧ 今年度の大研は3回。（低中高の学年ブロック各1回）全員で授業を参観し、事後研究会を行う。中研は、3回。（低中高の学年ブロック各1回）
- ⑨ 研究授業は、できるだけ、学年・学年部で国語と算数のバランスがとれていることが望ましいが、担任の意向はできるだけ尊重する。
- ⑩ 研究授業の前に、式次第・視点を書いた研究だよりを作成し、指導案を共に全職員に配布する。（2日前まで）研究授業が終わったら、速やかに研究だよりを発行し、全職員に配布する。（目標2週間以内）
- ⑪ 研究全体会での外部講師による指導を計画し、研究の充実を図る。
- ⑫ 先進校視察、研究大会参加などの校外研修を積極的に進める。
- ⑬ 活用力アップを図り、学び部中心にスパイス問題集中月間を設け、B問題への取り組みを強化する。
- ⑭ 学級経営を基盤とした授業を大事にするため、指導案に学級経営案をつける。

⑮

⑯

(4) 研究の内容

①「教師のみとり」について考える

- ・子供の事実（話した内容、表情、しぐさ、作品など）から、子供の真意を見抜く目を鍛える。（客観的・多面的に）
- ・自分のみとりをもとに、どのような支援やはたらきかけが子供のためになるのかを考え、アクションを起こす。（または、何もせず温かく見守る）
- ・子供の成長を見極め、自分のみとりを振り返る。
- ・自分のみとり方について、自ら話題を提供し、同僚のアドバイスをいただく。（多面的なみとり方）

②「関わり」について考える

- ・的確なみとりをもとに、学級や個の特性を考えながら、どのような関わり方が自然であり子供たちを高めるのか考える。
- ・日常生活での「つながり」を感得できるよう、支援の在り方を工夫する。
- ・よりよい「子供同士の関わり」「教材との関わり」「教師との関わり」を追究する。
- ・どのような『学び合い』ができるか考える。（探究型の学習）

③「教科の本質」について考える

- ・どのような力をつけたいのかを明確にする。
→ そのために国語でできること。算数でできることは何か。
- ・教材研究の徹底。 → 将来、どのような子供になってほしいかを見据えて。
- ・何を教え、何を教えないか（考えさせるか）を吟味する。
- ・指導法を吟味する。

④自分の授業について振り返る。

- ・子供の変容を実感させることができているか。
- ・子供の考える機会を奪っていないか。（しゃべりすぎない）
- ・子供にとって、実感を伴った学習、生きてはたらく学習、役に立つ学習になっているか。
- ・自分の学級経営を、真摯に振り返る。（「私は」ではなく、「子供にとってどうであったのか」）

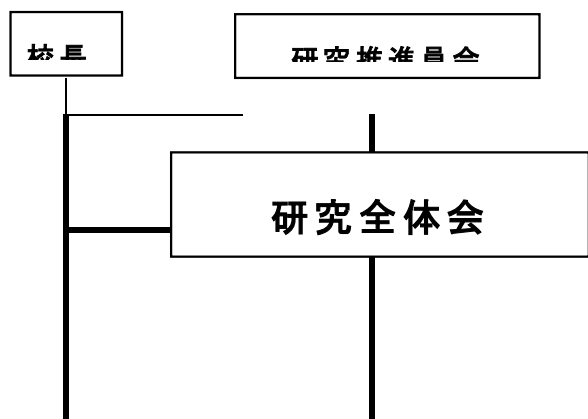
(5) 本年度のめざす子供の姿

支援学級	○自分でできることを自分でやろうとする子供。 ○相手の話を聞く子供。 ○自分の思いを言葉や動作で表そうとする子供。 ○教師や友達と一緒に活動を楽しむ子供。
低学年部	○自分でよく考え、進んで取り組む子供。 ○相手を意識して話したり、聞いたりする子供。 ○苦手なことにも挑戦する子供。 ○友達のよさに気付き、友達を大切にする子供。
中学年部	○共感したり考えの違いに気づいたりしながら、友達の考えを聞くことができる子供。 ○話す相手を意識し、相手の反応を見ながら話すことができる子供。
高学年部	○自分の考えをもって、主体的に学習に取り組む子供。 ○目的意識をもって聞き、友だちの考えのよさに気づく子供。 ○友だちとの関わりを通して、自分の考えを深めたり広げたりする子供。

(6) 研究計画

- ① 1 学期…
 - ・推進委員会は随時
 - ・全体研①
 - ・授業研究会の日程調整
 - ・指導案形式の検討
 - ・授業研究会
- ② 2 学期…
 - ・授業研究会
 - ・全体研②（年間反省、実践の整理）
 - ・研究集録形式提案
 - ・集録原稿作成（～2月）
- ③ 3 学期…
 - ・研究集録完成、関係機関に送付
 - ・全体研③（成果と課題、来年度の方向性）

(7) 研究組織



(8) 研究推進委員会（校長、教頭、教務、副教務）

◎工藤孝、多田、秋葉、佐藤、渋谷、佐々木、工藤千）

研究の原案づくり、日程調整、研究の日常化の推進などの活動を行う。

- ・授業研日程調整：（◎佐々木、秋葉、工藤千）
- ・指導案、研究集録の原案づくり：（工藤、佐々木）
- ・研究会の司会、記録、年間反省とりまとめ：（推進委員全員、随時分担）
- ・研究集録原稿取りまとめ、印刷、完成：（多田、佐藤、秋葉、副教務）
- ※研究集録については、各学年の推進委員が責任をもって原稿を点検し、取りまとめ、担当に渡す。
- ・研究案内、附属小学校公開研究会とりまとめ等：（渋谷）
- ・渉外：（教頭、教務、工藤孝）